

# 親鸞・道元両聖考

光 地 英 学

わが国鎌倉仏教の代表的仏教者であるとともに、日本仏教の双壁の親があるのは、実に親鸞・道元両聖とその宗教である（以下、親鸞を単に聖人、道元を禪師と呼称する。）この両聖の思想と生涯の比較論は、一応すでに村上专精博士（仏教統一論「実践論」）によってなされている。が私はここに同博士の御高説も参照しながら、さらに局視的な概説を試みたいと思う。

## （一）両聖の性格

両聖の性格と云っても、必ずしもいわゆるの性格の意味に限定してのものではない。性格に重点を置いてのものではないが、強いて云えば、両聖その人の比較という意味である。かかる視点から先ず同似性を略考してみる。

（一）何れもまず比叡山に学習し、しかもそれに満足しないで、山を下って夫々の求道を敢為している。（二）名利を嫌って

る。聖人は、「是非しらず邪正もわかぬこのみなり、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり」と「正像末和讃」等に自省のほどを陳述している。が、そのことそれ自体名利の念を厭うことを表出したものに他ならない。事実比叡山上、吉水にての入信、流罪、越後・関東にての生活、晩年洛中の生活、すなわち生涯を通じて不遇の一生であった。名利の栄光は殆ど見られない。禪師にては名利を捨離すること極めて峻厳なものがあつた。凡そ仏弟子たるもので名利を貪るならば、障道も甚しいものである、と嚴戒している。「知事清規」の次の文などもその一般である。「名譽利養、障道之甚。所以往古之在家出家、慕道之人、皆拋來者也。況乎一興叢席、<sup>(1)</sup>仏祖兒孫、豈貪于名利財産乎。」（三）鋭敏な性格。聖人は罪濁の衆生を撰取するという浄土教に立ってはいいるが、聖人その人について云えば、思想信仰をあくまでも鋭く追求して妥協しない性格であるというる。そのことは法然

仏教の受容の仕方、浄土教の掘り下げ方、また思想信仰の純粹性から実子善鸞を義絶したことなどに明示されている。一方禪師は、栄西の如き密・律との融合摂持を排し、富貴権勢等一切の妥協を肯じなかった。それは正伝全一の仏法稟持の矜持による批判精神に発するものとなしうる。その鋭い批判性は著述の随所に現われて鮮やかである。(四)現世祈禱の排除。聖人は吉日良辰、方角等のこと、そのことの占い等も峻拒している。これらは「和讃」殊に「教行信証」化巻にて明示しているところである。一方、禪師の場合も同様にいうる。「知事清規」に「ト<sup>(3)</sup>相吉凶、為人説法」こと等を離るべきことを強調、「学道用心集」第四に「不可<sup>(4)</sup>為<sup>(4)</sup>得<sup>(4)</sup>靈驗<sup>(4)</sup>修<sup>(4)</sup>仏法焉」といって、このことに対する自らの立場を闡明している。(五)何れも中国高僧の後身とみられている面がある。親鸞は曇鸞の後身であるとされている。覚如の「報恩講私記」に聖人について次の如く賛しているなどは、すなわちそれである。「祖師聖人匪<sup>(5)</sup>直也人<sup>(5)</sup>、則是權化再誕也。已称<sup>(5)</sup>彌陀如来応現<sup>(5)</sup>、亦号<sup>(5)</sup>曇鸞和尚後身<sup>(5)</sup>。禪師については、洞山良价禪師の後身であるとされている。それは天童如浄が禪師と初対面された日の前夜、浄祖が洞山を迎えた夢を見ていることなどの示すところである。(六)一宗を開創し、自ら宗祖たることを認容していない。聖人はその何れも本師法然上人に譲り、自らは本師の真意開顕者たるに止まっていた。「教

行信証」化巻、後序の文に「真宗興隆大祖源空法師」という。いう如く恩師源空を以て真宗興隆の偉大な祖師であると仰いでいる。「正信念仏偈」には「本師源空明<sup>(6)</sup>仏教<sup>(6)</sup>、憐<sup>(6)</sup>愍<sup>(6)</sup>善悪凡夫人<sup>(6)</sup>、真宗教証興<sup>(6)</sup>片州<sup>(6)</sup>、選択本願弘<sup>(6)</sup>悪世<sup>(6)</sup>」といひ、「高僧和讃」には「智恵光のちからより、本師源空あらはれて、浄土真宗ひらきつゝ、選択本願のべたまふ」と賛じているなどである。禪師にては師如浄の思想を継承して全一の仏法を挙揚した<sup>(6)</sup>。そして自らの仏法を宗派に限定すること<sup>(7)</sup>を極度に嫌っていた。従って宗名を否定し、自ら一宗の宗祖たることも、もちろん肯認しないところであった。

次に両聖の相違性を略記してみる。(一)聖人は情の人であるのに対して、禪師は知の人であり、意志の人である。(二)聖人は妻帯裡俗的生活をなしつつ、愛欲煩惱の自省のまま、如来の慈悲を慶喜した人である。それに対し禪師は、自浄一路の清僧である。人間の煩惱性と菩提性の二面のうち、聖人は前者、禪師は後者の各荷負い手であるといいうる。(三)聖人は民衆に挖泥滯水した大衆一味の人である。一方、禪師は峻厳身を持した孤高の人である。その非妥協性は、貴顕の出生でありながら敢えて宮廷貴族層に近づかず、自ら越前に山居して純一の仏法護持に終始したこと等の示すところでもある。(四)親鸞は非僧非俗、同信同行的立場に住し、愚禿意識に徹していた。「已非<sup>(8)</sup>僧非<sup>(8)</sup>俗、是故以<sup>(8)</sup>禿字<sup>(8)</sup>為<sup>(8)</sup>姓<sup>(8)</sup>」(「教行信証」化

卷、後序)などの述懐もその一の証左である。それに対し、禪師は仏法房と称せられたその如く、自ら正法伝持の人を以て任じていた。「西来祖道吾伝、東云々」の山居偈(永平広録卷第十)等は、その矜持を自示するものでもある。

註1 なお「名利は一頭の大賊なり。名利をおもくせば、名利をあらはれむべし。名利をあらはれむといふは、仏祖となりぬべき身命を、名利にまかせてやふらしめざるなり」(行持卷)「不可為名利而修仏法」(学道用心集第四)「亦諸仏菩薩に、随喜せられんことを思ひ、仏果菩提を成ぜんことを思ふも、我欲名利の心、なをすて得ざる故なり」(随聞記第五)

2 たとえば「かなしきかなや道俗の良時吉日えらばしめ、天神地祇をあがめつ、卜占祭祀つとめとす」(正像末和讃)「悲歎述懐讚」

3 これは五邪因縁の所得食の第三として挙げられているところのものである。

4 なお同「知事清規」に、四不淨食とし、食すべからざるものとされている第二に医方卜相、第三に星宿日月術数等の仰観がある。

5 建撕記、行録、明極和尚語録第三日東可禪人回郷条、大久保道舟博士「道元禪師伝の研究」(筑摩書房刊)一四九頁特に仏道卷・仏経卷・宝慶記等に説述

7 例えば「為無上菩提、求道之輩、不可以仏祖単伝直指無上正法、而禪宗者歟。若禪宗、非仏祖之見孫。」

(永平広録卷第七)なお仏道卷等に説述。

## (二) 両聖の宗教

ここでは両聖の宗教思想の相違点を対蹠的に考慮してみた。

(一) 聖人は弥陀教であるのに対し、禪師は釈迦教である。(二) 聖人は末法相應の他力教であるのに対し、禪師は正伝の仏法を時代思想に左右されることなく発揚した自力教である。(三) 聖人の宗教が如来の本願一乗の信の仏法であれば、禪師の宗教は正法を如実に行修せんとする行の仏法である。(四) 聖人は同朋意識に連なる在家主義の仏法であるのに対し、禪師は尊僧俗卑の出家主義の仏法である。(五) 聖人の宗教は機に立つのに対し、禪師のそれは法に立っている。聖人は現実自己の煩惱障・罪悪性の自省に立った救済の宗教であるのに対し、禪師は飽迄、理想の、換言すれば本来具有の仏性の覚醒に立った自覚の宗教である。(六) 聖人の宗教思想は、その主著「教行信証」にみられる如く組織づけられたものである。それに対し禪師の場合は、必ずしも軌を一にしないものがある。それは主著「正法眼蔵」にみても諒とされうる。これは親鸞教学が經典を所依とし、浄土教の体系の上に立宗せられているのに対し、直観的で体系づけを主として書かれたものでない禅一般の語録を背景としていたことの相違であるとされうる。(七)

聖人は平安仏教に対する鎌倉仏教の雄である。がしかし聖人自身の仏法は旧仏教の革新を意図しているものではない。一方、禪師も同じく鎌倉仏教の代表者であり、自ら旧仏教の革新を目的とした仏法の開頭ではなかった。しかし宋朝禅等に対する批判的立場から、中国の五家七宗以前に遡り、達摩純禅の仏法に還帰せんとする、いわば革新的抱負に任していた。そして又それより展開するものとしての僧風匡正を以て任務としていたことは否み得ない。(八)聖人は聖徳太子を和国の教主とし、敬仰奉賛の音ならぬものがある。それは求道時、聖徳太子の示現に預ったこと、皇太子聖徳奉賛をものしていることなどの雄弁に示しているところである。他方、禪師は聖徳太子に対しては殆ど無関心である。ただ「袈裟功德卷」に袈裟の功德を叙べるに際し、太子のことを僅かに記載しているに止まっている。これは禪師の尊僧性から、太子として俗人であるとの思想が背景となつていふものと考えられる。(九)聖人は生涯、造寺造塔しなかつた。自ら居住のところは草庵程度のものに過ぎなかつた。これに対し禪師は思想としては、造寺造塔を否定している。「行持卷」に殿堂造営に奔走するのを戒め、道心を以て専一に工夫すべきことを愆通しているなどその一般である。しかし衆僧の坐禅弁道する僧堂の造営には情熱を傾注した。そのことは宇治興聖寺の僧堂建立の勸進疏などによつても領知されうることである。(十)聖

人の信仰の対象は弥陀一仏である。しいていうならば弥陀・釈迦二尊であつて、他の諸仏菩薩その他に志向していない。これに対し、禪師の信仰の中心は釈尊である。しかしそれは中心というに止つて、その領域は広く諸仏祖、菩薩・天部等にもひらかれている。「知事清規」の竈公回向等もその一般である。(十一)聖人には所依経論があつた。經典としては浄土三部経、特に「大無量寿経」、論としては竜天二師及び源信の浄土教関係書、鸞・緯・導並びに法然のいわゆる七高僧の撰述であつた。それに対し、禪師は経論依用を否定するのではない、が特定のものを受用するというのではなかつた。不立文字、教外別伝という禅一般の立場を否定しつつも、また經典準拠というあり方ではなかつたことも看過され得ないことである。

註1 (前略)これによりて聖人は御同朋・御同行とこそ、かしづきておほせられけり。(蓮如「御文章」一帖目一)

2 抑親鸞聖人のすゝめたまふところの一義のこゝろは、ひとへにこれ末代濁世の在家無智のともがらにをひて、なにのめづらひもなく、すみやかにとく浄土に往生すべき他力信心の一途はかりをもて本とをしへたまへり。(御文章三帖目七)

3 やまをいて、六かくたうに百日こもらせ給て、こせをいのらせ給けるに、九十五日のあか月、しやうとくたいしのもんをむすひて、しけんにあつからせ給て候ければ、(後略)(恵信尼消息)

4 日本国には聖徳太子袈裟を受持し、法華勝鬘等の諸経講説のとき、天雨宝華の奇瑞を感得す。それよりこのかた、仏法わがくに流通せり。天下の撰録なりといへども、すなはち人天の導師なり、仏のつかひとして、衆生の父母なり。いまわがくに、袈裟の体色量ともに訛謬せりといへども、袈裟の名字を見聞する、ただこれ聖徳太子のおほんちからなり。